

講演タイトル

“To bone, or Not to bone”

エンド外科における GBR が果たしうる役割とその限界、そして今後の展望について

Title

“To bone, or Not to bone”

Resolving the controversy in GBR during Endodontic surgery

清水藤太 Tota Shimizu, DDS

ロサンゼルス開業

UCLA 歯学部、クリニカル・インストラクター

日本大学松戸歯学部、客員教授

1993年、鹿児島大学卒業。保母須弥也に師事し局部補綴学を修める。

1998年、ロサンゼルス南カリフォルニア大学（USC）大学院に入学。

2000年、アメリカ歯科国家試験合格

2000年、USC 臨床准教授に就任。大学院生の臨床指導に携わる。

2001年、カリフォルニア州歯科免許取得、ロサンゼルスにてエンド専門医として開業

2011年、南カリフォルニア大学歯学部“2011年度最優秀臨床准教授賞”、受賞。

2013年、UCLA 歯学部に移籍。クリニカル・インストラクター就

抄録

エンド外科において Guided Bone Regeneration (GBR) の手法をどう活用するかについては、賛否両論さまざまな論議があり、アメリカにおいても、外科の際に何らかの形で GBR を取り入れている専門医とそうでない者の割合は 4 : 6 と、ほぼ二分されているとの報告 (Navlor et al 2011 JOE) がされている。

しかしここで興味深いのが、後者がこれを行わない主な理由というのが“十分なエビデンスがない” “GBR に関する十分な知識が自分がない” という事であり、つまりは「よく分かっていないから、やらない（やれない）」という事であるらしい。この「臨床医の間で、エンド外科における GBR における最新の知見が共有されていない」という事こそが、最大の問題であるように思う。

したがって、本講演においては、

1. 広範囲な文献渉猟により、エンドにおける GBR の科学的エビデンスを提供する。
2. 豊富な臨床例を通じて、GBR の適応症と利点、そしてその限界を明らかにする。
3. 今後の展望、とくにエンド・インプラントロジーの文脈での GBR の更なる可能性を探る。

という 3 つの柱を軸に、エンドにおける GBR の過去・現在・未来を明らかにしていきたいと思う。